

第一章 お経について

私共は、日ごろの月参りの際に、『阿弥陀経』を読誦させていただいております。内容がわかれば味わいも深まるのですが、漢文のうえに仏教独特の言葉であふれております。

そこで仏教用語や仏教独特の言い回しをなるべくさげながら、『阿弥陀経』のあらすじを紹介させていただこうと思います。疑問点がございましたら、月参りの際にでもお尋ね頂ければと存じます。

お経とは何でしょうか。

お釈迦様は三十五歳でお悟りを開かれましたのち、八十歳でご入滅されるまで伝道の旅に出られました。ところがお釈迦様ご自身が書物をあらわされることはありませんでした。

ご入滅後、そのみ教えが乱れることへのおそれから、主要なお弟子方が集まって、お釈迦様の御説法の内容を互いに確認し、書物にまとめられました。それがお経であります。

その時、重要な役割を果たされたお弟子が阿難（あなん）と申されるお方です。『阿弥陀経』の中では阿弥陀と訳されています。

阿難尊者はお釈迦様につき従い、多く説法を聞かれたお弟子様であります。阿難尊者が暗唱されていたお釈迦様の説法を述べられ、居並ぶお弟子方も確かにそうであったと確認された上で書物にまとめられたものがお経となったのです。

お経の数はどのくらいあるのでしょうか。

お釈迦様は、人々の悩み苦しみに寄り添い、説法の内容をさまざまに工夫されました。

そのことは、病気にあわせて薬が処方されることにたとえられてきました。ですから、お釈迦様の面前で親しく説法を受けられた人々は、まさに自分自身にぴったりな教えを受けられたのであります。

そのために苦悩の数だけ説法があるといてもよく、その多さを八万四千（はちまんしせん）の法門ともいわれてきました。ところが、後世の人々にとっては、お経のあまりの多さが逆に問題となったのであります。

どういふことかと申しますと、お釈迦様不在の世の人々は膨大な經典の中から自分にとってぴったりあう經典を自分で見つけ出さねばならぬからであります。お釈迦様ならぬ身にとってそれはまさに至難の業であります。

そのため、むかしから高僧方が我々にぴったりあつた經典を探し求めて研究を重ねてこられました。それは日本の高僧方も同じであります。

浄土真宗とどのような関係があるのでしょうか。

高僧方は、我々にぴったりあつた經典を見つけた後に、その經典を根拠として「〇〇宗」を開かれたのであります。したがってどの御宗旨にもそのみ教えの根拠となる經典があります。

浄土真宗の場合には『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿彌陀経』の三部のお経が根拠となっております。それらを浄土三部

経と申します。

なぜ浄土三部経なのでしょう。

他力念仏のみ教えは、浄土三部経が根拠であるとお示し下されたのは法然聖人でございます。

このことは法然聖人の御著作『選択本願念仏集（せんじやくほんがんねんぶつしゅう）』に記されてあります。そして法然聖人のお弟子様であらせられる親鸞聖人も師匠の仰せのとおりのお考えであります。よって浄土真宗のみ教えは浄土三部経を拠り所とするのです。

『仏説無量寿経（ぶつせつむりょうじゆきょう）』について

三部経の中で最も長いので『大無量寿経（だいむりょうじゆきょう）』とも、また略して『大経（だいきょう）』ともいわれます。

法蔵菩薩様が、私共を救うために四十八の願をたててご修行あそばされ、そのご修行の結果、阿弥陀佛となられてお名号による救いが完成したことが説かれています。

『大経』は浄土三部経の中でも中心となるお経であります。むかしから『大経』にはお名号の救いの真実であることが明かされているといわれております。

日ごろお勤めされることもある『讃仏偈（さんぶつげ）』や『重誓偈（じゅうせいげ）』は『大経』の中の一節であります。

『佛説観無量寿経（ぶつせつかんむりょうじゆきょう）』について

『観経（かんぎょう）』とも略称されます。お釈迦様の時代にイン

ド大陸にあったマガタ国でおこった悲劇の最中に説かれたお経であります。その悲劇の内容はここでは省略させていただきます。

お経の発端は、悪友にそそのかされた王子が、父である国王と母である王妃を殺害しようとたくらむことです。その渦中で王妃はこの世を厭い、どうしたらこの苦しみから逃れることができるだろうかと問うのです。その問いに答えるために、王妃に向かって説かれたのが『観無量寿経』であります。

『観無量寿経』はお念仏による救いの目当てとなるものすがたを明らかにしているといわれております。そして、お経の最後にはお念仏を勧めるといふ内容であります。

『佛説阿弥陀経（ぶつせつあみだきょう）』について

三部経の中で一番短いので『小経（しょうきょう）』とも略称されます。

『阿弥陀経』はお弟子様の舍利弗（しゃりほつ）を相手に説かれた経典でございます。お念仏のみ教えの間違いないことをお釈迦様や無数の佛様方が証明されとともに、私共に勧めておられるお経であります。

『阿弥陀経』はお釈迦様のお弟子様の中で最も智慧が優れているといわれる舍利弗に一方的に呼びかける形式で説かれます。

お釈迦様が誰の要請も受けることなく一方的にお説きになられたので、お釈迦様のご本意が明かされているとされます。このため出世本懐（しゅつせほんがい）の経といわれます。

第二章

『阿弥陀経』を拝読する前に、必要なことがらを簡単にご紹介しておきます。

成仏（じょうぶつ）について

悟りを開くことであります。その方法には他力と自力があります。

他力（たりにき）による成仏について

他力とは阿弥陀様のおすくいのはたらきでございます。それは「南無阿弥陀」の名号のはたらきでございます。お名号が私の上でおはたらきになっているすがたをご信心といい、口からもれる出るとき称名念仏といいます。これを他力念仏といいます。

自力（じりき）による成仏について

悟りを開く方法は多くありますが、他力念仏以外のすべてを指します。たとえお念仏であっても自分の手柄にすれば自力です。

親鸞聖人（1173〜1262）について

浄土真宗の御開山聖人でございます。比叡山での修行では「生死出づべき道」を見出すことができずに、法然聖人のもとに参じられました。そして他力念仏のみ教えに出会われたのであります。

親鸞聖人のご著作について

『顕浄土真実教行証文類』（けんじょうどしんじつきようぎようしようもんるい）が代表的著作であります。浄土真宗の根本となる書物であります。略して『教行信証』（きょうぎようぎようしんしょう）ともいわれます。また『御本典』（ごほんでん）ともお呼びいたします。

「教文類（きょうもんるい）」「行文類（ぎょうもんるい）」「信文類（しんもんるい）」「証文類（しょうもんるい）」「真仏土文類（しんぶつどもんるい）」「化身土文類（けしんどもんるい）」の全六巻から成り立っております。

『正信偈（しょうしんげ）』について

『顕浄土真実教行証文類』の「行文類」の末尾にある漢詩です。親鸞聖人が、阿弥陀様のお徳と七祖のお徳を讃えられたものでございます。毎月十四日の常例法座でお勤めさせて頂いております。

七祖（しちそ）について

歴史上には、他力念仏のみ教えを明らかにしてくださった数々の高僧方がおられます。その中で特に重要であると親鸞聖人がお考えになられたのが七名の高僧方でございます。七祖（しちそ）あるいは七高僧（しちこうそう）とお呼びいたします。

親鸞聖人は『正信偈』の中で七祖のお徳を讃えられております。次に紹介いたします。

龍樹菩薩（りゅうじゆぼさつ） 150頃〜250頃

『正信偈』の五十一句目に
「龍樹大士出於世」とあります。

インドの高僧でございます。ナーガールジュナを中国語に訳して龍樹と申されます。さとりを開く方法に易行道（いぎようどう 他力念仏です）と難行道（なんぎようどう 自力修行です）の二つあることを明かされました。

天親菩薩（てんじんぼさつ） 400頃〜480頃

『正信偈』の六十一句目に

「天親菩薩造論説」とあります。

インドの高僧でございます。インド名をヴァスバンドウと申します。世親菩薩（せしんぼさつ）とも訳されます。天親菩薩様の兄上を無着（むじやく）様と申されます。奈良の興福寺北円堂にお二人の木像がございます。

龍樹・天親の両菩薩様は仏教の歴史においてならばものない莫大な功績を残されました。このお二人は浄土真宗に限らず、仏教全体にとりまして、最も重要なお方でございます。

曇鸞大師（どんらんたいし） 476〜543

『正信偈』の七十三句目に

「曇鸞大師梁天子」とあります。

中国の学僧でございます。「他力」とはひとえに阿弥陀様の力（本願力といえます）であることを初めて明かされたのであります。その功績は極めて重要であります。

そのことは親鸞聖人のお名前が天親菩薩様の「親」の字と曇鸞大師様の「鸞」の字を組み合わせて「親鸞」とされたことでもわかります。

道綽禪師（どうしゃくぜんじ） 562〜645

『正信偈』の八十五句目に

「道綽決聖道難証」とあります。

中国の学僧でございます。さとりに至る道には、この世で悟りを開く聖道門（しょうどうもん）と、お浄土にて悟りを開く浄土門（じ

ようどもん）の二つの道のあることを明かされました。

善導大師（ぜんどうだいし） 613〜681

『正信偈』の九十三句目に

「善導独明仏正意」とあります。

中国の学僧でございます。道綽禪師様のお弟子様です。その功績は『観無量寿経』の真の意味、すなわち仏様のご本意を明らかにされたことです。その代表的著作は四部からなる『観経疏（かんぎょうしよ）』と申す書物であります。葬儀において読誦される「帰三宝偈（きさんぼうげ）」はその中におさめられた漢詩であります。

法然聖人が他力念仏のみ教えに出会われたのは、善導大師様のご書物によつてであります。

源信僧都（げんしんそうづ） 942〜1017

『正信偈』の百一句目に

「源信広開一代教」とあります。

比叡山の学僧でございます。専門的になりますが、お浄土には他力念仏の人が往生する真実報土（しんじつほうど）と、自力の人が往生する方便化土（ほうべんけど）のあることを明かされました。

法然聖人（ほうねんしょうにん） 1133〜1212

『正信偈』の百九句目に

「本師源空明仏教」とあります。

正しくは源空（げんくう）聖人と申されます。比叡山で学ばれた学僧でございます。善導大師様のご著作によつて他力念仏に出会われ、日本において浄土宗を独立されました。そして浄土三部経をその根拠とされたのであります。親鸞聖人のお師匠さまでございます。

第三章

今回より『阿弥陀経』の内容を拝読してまいります。

お経文を一行掲げましてから、その隣に読み方を並べます。読み方は注釈版聖典を引用させて頂きました。漢文を読み下した文章です。その後のことばの説明、大意、内容と続けてまいります。

※注釈版聖典とは、親鸞聖人の御著作をはじめとして浄土真宗の大切な文書をまとめた書物です。本願寺より発行されており、引用させて頂いたために書名を掲げました。お持ちでなくてもさしつかえありません。

【1】お経文

読み方

『仏説阿弥陀経』

ぶっせつあみだきよう

ことばの説明

仏説(ぶっせつ)

「仏説」とは文字通り仏様が説かれたということであり、また仏様のおこころにかなうとされる書物も仏説であるとされます。またたとえば天親菩薩様の御書物の中には仏説であるとされるものもございいます。つまり、仏説とは仏様のおこころにしたがった真実であ

ることのしるしであります。逆にいうと仏説以外に真実はありません。信ずるに値するものは仏説のみであります。

私どもは阿弥陀様の仰せのみをたよりにすべきであります。

【2】お経文

読み方

姚秦三蔵法師鳩摩羅什

ようしんさんぞうほつしくまらじゅう

奉詔訳

ぶしょうやく
詔(しょう)を奉(うけたまわ)りて訳す。

ことばの説明

姚秦(ようしん)

昔中国大陸に存在した姚秦(384〜417)という国において中国語に翻訳されたのであります。

三蔵法師(さんぞうほつし)

三蔵法師とは、

経蔵(きょうぞう) 仏様のみ教えを記した書物のあつまり。お経。
律蔵(りつぞう) 戒律をしるした書物のあつまり。

論蔵（ろんぞう）仏様のみ教えを解釈した書物のあつまり。

以上の三つの蔵、三蔵に精通された高僧をたたえた名称であります。多くの人が三蔵法師と聞いて思い浮かべられるのは『西遊記』で有名な玄奘（げんじょう 602～664）三蔵法師ではないでしょうか。

玄奘三蔵法師もまた、この『阿弥陀経』を中国語に訳されておられます。そのことについては、のちほどご紹介いたします。

鳩摩羅什（くまらじゅう）

『阿弥陀経』を中国語に翻訳された三蔵法師のお名前でございます。クマラジーヴァというお名前を漢字にあてたものです。ですから漢字には意味はありません。

奉詔訳（ぶしょうやく）

「詔（みことのり）」とは国王の命令です。国王の命令を奉じて、翻訳したということになります。つまりこの翻訳は国家事業であったということになるでしょう。

内容

この阿弥陀様のお徳を諸仏方が称讃されるお経は、姚秦の国王の命令によって、国家事業として翻訳されたのであります。翻訳者の名前は鳩摩羅什といえます。

玄奘三蔵法師様もこの『阿弥陀経』を中国語に翻訳されておられ

ます。そこにはこのようにあります。

『称讃浄土仏摂受経』

大唐三蔵法師玄奘奉詔訳

中国の唐の時代に皇帝の命令によって、国家事業として翻訳が行われたことがわかります。

続いて本文を拝読してまいります。その準備としてお経の段落分けについてご紹介しておきます。

『阿弥陀経』に限らず、お経というのは三つの段落に分けられる場合が多いのです。それは序分・正宗分・流通分という三つの段落でございます。

序分（じよぶん）

お経が説かれるに至ったいきさつが説かれてあります。

正宗分（しやうしゅうぶん）

お経の中心部分であります。

流通分（るずうぶん）

後の世にこのお経を語り継ぐべきことが説かれてあります。

次回から序分・正宗分・流通分の順序で『阿弥陀経』を拝読してまいります。

第四章 『阿弥陀経』の序分

【3】お経文

読み方（注釈版聖典 121頁 からの引用）

如是我聞によぜがもん

かくの如く、われ聞きたてまつりき。

ことばの説明

如是我聞（によぜがもん）

第一号の中で、お経の成り立ちについてご説明いたしました。お釈迦様のご入滅の後、お釈迦様のみ教えが乱れることへのおそれから、ご説法を文字にする仕事が行われました。その時、大切な役割をはたされたのが阿難様でございます。阿難様はお釈迦様につき従い聴聞されたために、多くの説法を暗唱されていたのであります。その暗唱内容を代表的なお弟子様方が確認した上で、書物にしたのがお経であります。

そのため、お経の最初の御文は、阿難様が「わたしはこのようにお釈迦様のご説法をお聞きいたしました」と申されるお言葉となつていのです。

如是（によぜ）とは、真実になうということでありませう。これから述べられる内容は、一言一句に至るまでお釈迦様の説法に間違いなことを阿難様が証明するお言葉であります。

我聞（がもん）というのは、阿難様が「わたしはお聞きいたしました」という意味です。如是我聞とはこれから説かれる『阿弥陀経』の内容は、お釈迦様のご説法に間違いなことの証明であります。

大意

私（阿難）はお釈迦様の説法を、以下のように私心をまじえることなくそのままお聞きいたしました。

内容と味わい

仏教では、聞いて理解して修行するといわれます。これを聞思修（もんししゆ）といいますが、まず最初に「聞」とありますように聴聞することが大切であります。仏教では説法を私心なく、仏様のみこころのままにお聞きすることが第一であります。

特に真宗では、阿弥陀様の仰せを疑いなく聞いている事がそのまま阿弥陀様のお救いに預かることでもありますから、聞法にきわまるのであります。「如是我聞」とは念仏者の姿でもあります。

【4】お経文

読み方（注釈版聖典 121頁 からの引用）

一時佛 在舍衛国祇樹給孤独園

ひと時、仏、舍衛国の祇樹給孤独園にましまして、

与大比丘衆 千二百五十人俱。

大比丘の衆、千二百五十人と俱なりき。

皆是大阿羅漢 衆所知識。

みなこれ大阿羅漢なり。衆に知識せらる。

ことばの説明

舍衛国（しゃえこく）

お釈迦様の時代に、インド大陸に存在したコーサラ国のことです。コーサラ国の首都である舍衛城において『阿弥陀経』は説かれたのであります。

祇樹給孤獨園（ぎじゆきつこどくおん）

スダッタ長者といわれるお方が、私財を投じてお釈迦様の仏教団のために建設された道場であります。略して祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）ともいいます。精舎（しょうじゃ）とはインドの言葉ヴィハーラを翻訳した言葉で出家者の住む僧院という意味です。『観無量寿経』が説かれた王舎城（おうしゃじょう）には竹林精舎（ちくりんしょうじゃ）がございます。

比丘（びく）

出家した修行者のことです。ここでは仏様のお弟子様のことと理解しておけばよいでしょう。インドの言葉ビクシユを漢字にあてはめたものなので、漢字に意味はありません。

千二百五十人（せんにひやくごじゅうにん）

初期の仏教教団のお弟子様の人数とされております。その内訳は、舍利弗（しゃりほつ）・目連（もくれん）がお釈迦様に入門する時に引き連れていた二百五十人の弟子と、迦葉（かしょう）三兄弟が入門する時に引き連れていた千人の弟子の合計であるといわれております。

阿羅漢（あらかん）

出家者の修行の段階の名称です。阿羅漢の位置づけは様々に考えられますが、ここではすぐれた仏弟子に対する敬称と考えればよいでしょう。

衆所知識（しゅうしようちしき）

ひろく知られているということです。

大意

ある時、お釈迦様はコーサラ国の祇園精舎において、千二百五十人の優れた出家者とともにおいででした。この出家者は皆、広く知られた優れた聖者でございました。

内容

『阿弥陀経』はコーサラ国の祇園精舎において、すぐれた出家者千二百五十人を前にして説かれたということでありませぬ。次に具体的なお名前が挙げられます。

【5】お経文

読み方 (注釈版聖典 121頁 からの引用)

長老舍利弗 摩訶目犍連 摩訶迦葉 摩訶迦旃延

長老舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・

摩訶俱絺羅 離婆多 周利槃陀伽 難陀 阿難陀

摩訶俱絺羅・離婆多・周利槃陀伽・難陀・阿難陀・

羅睺羅 驕梵波提 賓頭盧頗羅墮 迦留陀夷

羅睺羅・驕梵波提・賓頭盧頗羅墮・迦留陀夷・

摩訶劫賓那 薄拘羅 阿ぬ楼駄

摩訶劫賓那・薄拘羅・阿ぬ楼駄、

如是等諸大弟子、

かくの如きらの諸の大弟子、

ことばの説明

ここに列挙されているのは、お弟子方のお名前です。インド名の音を漢字にあてはめていますので、漢字自体には意味はありません。

舍利弗（しゃりぼつ）

シャーリプトラといいます。十大弟子の中で智慧第一といわれるお方です。

摩訶目犍連（まかもつけんれん）

マハーモツガラーナといいます。十大弟子のお一人で神通第一と称せられました。目連（もくれん）ともいわれます。

摩訶迦葉（まかかしよう）

マハーカツサバといいます。十大弟子のお一人で頭陀第一と称せられました。

摩訶迦旃延（まかかせんえん）

マハーカツチャヤナといいます。十大弟子のお一人で論議第一と称せられました。

摩訶俱絺羅（まかくちら）

マハーコーステイラといいます。

離婆多（りはた）

インド名をレーヴァタ・カディラヴァニヤといいます。

周利槃陀伽（しゆりはんだか）

チューダ・パンタカといいます。

難陀（なんだ）

ナンダといいます。

阿難陀（あなんだ）

インド名をアーナンダといいます。阿難ともいいます。お釈迦様の説法を多く聞法されたので、多聞第一と称せられました。

羅睺羅（らごら）

インド名をラーフラといいます。お釈迦様の御子息でございます。

す。十大弟子のお一人で密行第一と称せられました。

驕梵波提（きょうばんはだい）

インド名をガヴァーンパティといいます。

賓頭盧頗羅隲（びんずるはらだ）

ピンドーラ・バーラッドヴァーージャといひます。各地のお寺で「びんずるさん」として親しまれてゐるお方であります。

迦留陀夷（かるだい）

カールダーインといひます。

摩訶劫賓那（まかこうひんな）

インド名をマハーカツピナといひます。知星宿第一と称せられました。

薄拘羅（はくら）

インド名をヴァツクラあるいはバークラといひます。長寿第一と称せられました。

阿ぬ楼駄（あぬるだ）

アヌルツダといひます。十大弟子のお一人で天眼第一と称せられました。

【6】お経文

読み方（注釈版聖典 121頁 からの引用）

并諸菩薩摩訶薩 文殊師利法王子 阿逸多菩薩

ならびに諸の菩薩摩訶薩、文殊師利法王子・阿逸多菩薩・

乾陀訶提菩薩 常精進菩薩 與如是等

乾陀訶提菩薩・常精進菩薩、かくのごときらの

諸大菩薩 及釈提桓因等 無量諸天大衆俱。

諸の大菩薩、及び釈提桓因等の無量の諸天大衆と俱なりき。

ことばの説明

ここに列挙されているのは、法座に連なつた菩薩方や天の神々のお名前であります。お弟子方と同じくインド名の音を漢字にあてはめてゐるので漢字自体には意味はありません。

文殊師利法王子（もんじゆしりほうおうじ）

文殊（もんじゆ）菩薩様でございます。

阿逸多菩薩（あいつたぼさつ）

弥勒（みろく）菩薩様でございます。

釈提桓因（しゃくたいかんいん）

帝釈天（たいしゃくてん）様でございます。

内容

以上をもつて序分の内容をまとめますと、

『阿弥陀経』は、コーサラ国の祇園精舎において、長者の舍利弗をはじめとするお釈迦様の弟子の皆さま、文殊菩薩様などの菩薩方、帝釈天などの神々が説法の座に連なるなかで説かれた經典であるということになります。